

第3回 Yamagata みらいコミュニティ座談会・概要

1. 日 時：令和2年11月10日（水）14時30分から16時00分まで

2. 場 所：山形県総合文化芸術館「やまぎん県民ホール」から中継

3. 出席者

パネリスト：内田光紀氏、小野寺忠司氏、柴田裕氏、富松希氏、渡辺信生氏
（一社）ふるさと山形移住・定住推進センター：駒林雅彦専務理事（兼）事務局長
県：吉村美栄子知事、小林剛也みらい企画創造部長、渡辺将和産業労働部長

4. 会議次第

1 開 会

2 知事あいさつ

3 説 明

(1) 「スタートアップステーション・ジョージ山形」から始まる山形県のイノベーション

(2) その他

4 パネルディスカッション

テーマ：「仕事・イノベーション」

5 閉 会

5. 会議録

■開会

■知事あいさつ

■説明

(1) 「スタートアップステーション・ジョージ山形」から始まる山形県のイノベーション

(2) その他

- ・ 資料により、小林みらい企画創造部長から説明。

■「仕事・イノベーション」をテーマとして、パネルディスカッション

- ・ 各パネリストより、仕事やスタートアップ、現在の取組みについて紹介の後、意見交換。

【内田光紀氏】

- ・ ずっと東京で働いていて、創業を機に長野に会社を作り、以来、長野と東京の2拠点で生活するスタイルを送っている。
- ・ そもそも自分が創業しようと思ったのは、メーカーでの勤務経験を通じて、日本の経済力、競争力が低下していくのを、平成の30年間、目の当たりにしてきたことが背景にある。自分にできることは何だろうと考えたときに、人材の事業をやろうと思い、IT

人材の紹介業を長野で立ち上げた。

- ・そして、東京でも別のベンチャー企業をやっているため、2拠点で行ったり来たりしつつ、もともとの専門でもあった海外取引の仕事では、シリコンバレーの会社と繋がり、毎朝海外との電話から始めるという生活をここ数年送っている。

【小野寺忠司氏】

- ・以前はNECにいたが、その後、NECがレノボに吸収合併されたことから、レノボで技術開発を、その後、企画業務に携わっていた。そのうち山形大学から声が掛かり、5年前に山形大学の国際事業部研究センターを立ち上げ、いろいろなことをやらせてもらっている。
- ・力を入れているのは人材育成教育。山形を基軸にして、若者人材を育て、そこからスタートアップにつなげている。

【柴田裕氏】

- ・先週、たまたま山形に行く機会があり、霞城セントラルに寄らせていただいた際、スタートアップステーションの工事現場を拝見した。完成まで時間がかかると思っていたが、完成したと聞いて、山形県はスピーディーだと感想を持ち、見習わないといけないと思った
- ・JR東日本スタートアップはJR東日本の子会社として、JR東日本とベンチャー企業を繋いで、まさに新結合して、新しい事業、新しいソリューションを作ろうという活動をしている。

【富松希氏】

- ・山形市売り上げ増進支援センターY-bizは、中小企業、そして地域のこれから起業しようとしている方、新しい事業に取り組まれている方を対象に、売上アップに特化した支援を行っている。
- ・具体的には、スタートアップの企業も同じだが、中小企業も大企業と比べて人・物・金と言われるリソースに限りがあることが課題であり、またそこを生かすことで、新たな道、新たな知恵出しができると思うが、そういった課題に対し、どれだけ新たにお金をかけずに、今ある強み、今あるリソースを生かしながらビジネスの流れを変えることができるか、そういった支援を地域の事業者の方々と向き合いながら、サポートさせていただいている。

【渡辺信生氏】

- ・東京都内のウェブマーケティング会社に所属していたが、13年ほど前に会社に所属したまま、山形にUターンをした。当時、リモートワークという概念すらなく、この人は何をして働いてる人なんだろうと見られることが多かったが、コロナ禍の中で、リモートワークが一般的になり、ようやく、あの人はこういった仕事をしていたんだと認知してもらえるようになった。
- ・現在は、ウェブマーケティング会社を退職し、今年5月から山形市内で介護業界のクラウドサービスをスタートアップという形で打ち上げて、サービスを提供している。
- ・山形では、スタートアップでクラウドサービスを提供するという形は少ないが、徐々

に増えてきている兆しはあるので、これからどんどんチャレンジする人たちに向けていろいろ話をしていきたい。

【小林みらい企画創造部長】

- ・これまでのビジネスモデルは東京の本社が地方に企画を出し、地方が実施することが、高度成長期にありがちな、日本のビジネス環境だったと思うが、このスタイルが崩れつつある中、必ずしも東京を介在させず、もちろん東京は東京の良さもあるので、東京も1都市としてということになるが、地方と海外が直接いろいろできる時代になってきたと思っている。
- ・そのような時代の中で、内田さんは長野でアップリズム株式会社を創業された。内田さんは、長野や東京に加え、シリコンバレー、台湾など海外の拠点も自由に行き来されているので、場所というものの持つ意味を教えていただけないか。

【内田光紀氏】

- ・私のビジネスパートナーは、台湾とインド、シリコンバレーにおり、今はコロナのため新しい人が入ってくるのは、もう少し時間はかかるが、体制としては、インドや台湾から優れたIT人材を日本の企業に紹介できるという状況になっている。
- ・面白い話として、海外の人は、アップリズムという会社が長野県にあるということに全く気にしてないということがある。自分は長く東京で勤めていたので、東京にいるとどうしても、東京が中心で、東京がハブとなって世界と日本を橋渡しするという意識になるが、海外の取引相手の目線に立つと、日本のどこに会社があるか本当に気にしない。それがすごく新鮮だった。
- ・コロナ禍の中で、通信が完全にオンラインに切り替わった瞬間に、海外から「日本でこんなビジネスをしたいのでつないでくれないか。」「ちょっと相談に乗って欲しい。」といった問い合わせが増えた状況。信頼できる個人なり会社があり、人間ってそういうところに相談したくなるものだ、場所はあまり関係ないと、改めて感じている。
- ・ビジネスパートナーのインドの人材会社は、日本語ができて、ITの技術を備え、プログラミングができる人材を養成しており、コロナが収束した際には、当社がその間に入り、インドと日本のハブとして人材を紹介することになっている。現在は新規入国が難しいので、その学校を卒業してすでに日本で活躍しているIT人材の人たちや、日本国内にいる人たちの人材を紹介している。
- ・加えて、インドの方で開発をしたいという中小企業さんのためのオフショアリング、例えば、インドへのプログラミング作業の受託サービスの仲介等もしている。

【小林みらい企画創造部長】

- ・吉村知事のもと、様々な方の協力を得て山形幸せデジタル化構想を今年3月に策定することができた。地方共通の課題なのかもしれないが、その議論の中で、山形県内では企業のデジタル需要が少なく、人材がみんな東京に行ってしまう。ところが、DXがビジネスの柱になっていく中で、デジタルを分かる人が山形にいなくなってしまう、需要は大きいのに供給がマッチしていないといった山形県のIT人材の問題が指摘された。

- ・そこを我々県としてもしっかり解決するというのが、県内のデジタル化を進める上で大事なこと。内田さんのようなサービスが、地域にとって、一つの光ではないかと思っている。中小企業を含め、企業が生産性アップのためにデジタル化が必要だという中で、外国の高度な人材も一緒にやっていくことは非常に大事だと思うが、内田さんは、どのように考えているか。

【内田光紀氏】

- ・特に東南アジアの地域においては、日本で働きたい希望を持っているエンジニアがたくさんいる。日本は魅力に溢れた国で、食べ物が多く、清潔であり、人々がやさしい。これって、日本人が思っている以上に大きな魅力で、その日本で彼らが母国で学んだスキルを生かし、働くことを心待ちにしている。この事実をたくさんの人に知って欲しい。

【小林みらい企画創造部長】

- ・渡辺さんには、これまで何回か、ジョージ・ヤマガタ氏オンラインセミナーに出ただけ、IT人材にとって異業種との交流が必要だ、そういった新結合という交流が大事だとおっしゃられていたが、実際に仕事をしている中で、どのように感じられているか。

【渡辺信生氏】

- ・異業種の交流では、システムエンジニアや、マーケターだったり、いろんな業種がある。私は、システムエンジニアをしているが、システムエンジニアは業種にあまりこだわりがなく、いろんな課題がある中で、プログラミングというツールを使って、その課題をどう解決していくかというところを考える。
- ・私の場合は、代表の三浦が、ITを使って介護事業所の課題を解決したいと思い、私に話を持ってきた。その課題を聞いた時、介護業界には2025年問題や、コロナ禍でいろんな課題があるといった話を聞いていたため、すごいチャンスがあると思った。介護とITを結びつけ、化学反応を起こせば、2025年までに絶対面白いことができると、私の中でイメージがわいてきたため、一緒に組んで、新しいサービスを作ろうとなった。
- ・エンジニアをしていると、どの業界がといったことはあまり考えず、課題の本質はどこか、その課題をプログラミングで解決できるのかと考えることが、癖になっているので、異業種という概念はなく、面白いかどうかというところがポイントになると思っている。

【小林みらい企画創造部長】

- ・三浦社長と一緒にやっている介護事業とのマッチングだが、これまでは介護サービスを必要としている方と介護事業所等とのつながりが手作業で行われるなど、非常に非効率な運営を行っているといった課題があったと聞いていたが、その課題に対してどのような解決法を考えているか、紹介いただけないか。

【渡辺信生氏】

- ・三浦が運営している介護事業所が出てきた課題だが、まず、介護業界の一番大切なサービスは、介護を必要とする利用者の方へのサービスだと思っている。そこが一番重要だが、それ以外の日々の報告といった業務も介護士が行なわなくてはならない。そして、

実際に介護を受ける利用者の方、ケアマネージャー、サービスを提供する事業所の三者が情報共有するのに使っている手段が、ファックスや電話というのが実情。弊社以外でも、いまだにファックスがメインであって、報告は電話でしますといったところが多いと思う。情報が紙で、どんどん事業所の中で溜まり、利用者にとって必要なサービスが何なのかを考えたときに、紙を1枚1枚めくって探したりする。そういった中で情報共有が漏れてしまうことがある。また、利用者の方がサービスを受ける事業所が複数の場合には、ケアマネージャーが介護事業者1件1件に電話やファックスで確認し、情報共有する等、とても非効率だった。

- ・そこで、ITの力を使って、クラウドサービスで情報共有をできるようにしようと、三浦と始めたのがこの会社、株式会社 CARESPACE。そうするだけで、とても事務作業が減る。例えば、ファックスを送るためだけに自分の事業所に戻って行っていた作業も、自宅でメール代わりにクラウドのシステムに入力するだけで、他の介護事業所と情報共有ができる、そういう情報共有が進むことで、介護利用者の方へのサービスの向上につながっていく。

【小林みらい企画創造部長】

- ・山形県の高齢化率33%というのは、現場の三浦社長の問題意識であり、そこに渡辺さんのようなSEの方が向き合うことにより、山形県のケアマネージャーだけではなく、もしかしたら人手不足の中で大変な思いをしている問題の解決につながる事業なのかと思った。
- ・また、クラウドサービスの導入には初期コスト等かかるかもしれないが、ファックスや、土日、夜中に会社に行くコストと比べると、クラウドサービスを使った方が安いのではないかと思う。こういった工夫をすることで、要介護者の方によりよいサービスを多く提供できる、さらには売り上げ増進にも繋がると思うが、どのような感想を持ったか、富松さんに聞かせていただきたい。

【富松希氏】

- ・時間やお金には限りがあるが、中でも時間と人は本当に限りがあるものだと思っている。仕事をしているスタッフが忙しくなると、サービスの質も下がるし、新しいものを生み出すエネルギーを割けなくなる。
- ・先ほどの話で、テレワークという話も出たが、このDXを使うことによって、より価値が高い、人の知恵や、人の温かさが生み出す労働集約型ではない部分にエネルギーを割くことができると、会社の価値も上がり、サービスの質も上がり、ひいては売り上げにも繋がり、事業者のサービスを受けるお客様への便益も高くなるので、何を効率化し、逆に効率化せずに向き合う部分を切り換え、切り分けて考えていくことが、資源が限られるスタートアップ、そして中小企業の方々の取り組みを進めていく上で大事になってくるのではないかと思っている。

【小林みらい企画創造部長】

- ・まさにそこが非常に大事な、これから日本が、山形が高度な付加価値を有する社会に変化していく中で、大切な視点だと話を伺って思った。Y-biz ではどんなことをしてい

るか、それがこういったオンライン、リアルを含めたコミュニティ形成にどのように役立っていくか、富松さんに伺いたい。

【富松希氏】

- ・ 私たちが支援する際のテーマの一つに、ターゲットを絞るということがある。お客が誰か、ターゲットを絞り、その上で情報発信することを支援の一つとしている。今まで SNS がなく、お客、ユーザーと繋がるための方法が、ラジオや新聞、テレビの広告だった時代においては、広く情報を伝え、その中で反応してくれる方と繋がっていくことだったが、現在のお金や時間、宣伝するためのコンテンツを作るエネルギーがかかってくる中において、事業の強いところがどこで、それが一番響くお客さんはどこかを考えることで、よりコストをかけずに、お客に売りを伝えていく支援をしている。
- ・ 事例として、東北珍味というおつまみの会社を紹介させていただくと、これまでは、おつまみを中身が見える透明な袋で、お得感があるよう販売していたが、それだと価格競争に巻き込まれてしまうため、何か独自の強みのある売り方ができないか相談があった。そこに対して一緒に取り組んだのが、今までの売り方と逆になるが、お得感ではなくて、小分けにして、しかも中が全く見えない袋に入れて販売することを提案させていただき、取り組んでいただいた。これまでとは逆の食べ方により、お得なものとしての小売ではなく、ほぼ定価で扱うようなコンビニや、道の駅で売ることができるようになり、安売りに巻き込まれなくなり、販路が広がった。ファミリーマートからも声が掛かり、関東の「ファミマ！！（ファミマビックリマーク）」で SNS 発信することにより、通販での集客もできるようになった。
- ・ ターゲットを絞ることで、かけるエネルギーを集中させることができるとしており、小さい会社が新しいことを始めるのであれば、みんなに愛される商品ではなくて、この人に愛される商品、この人に使われるサービスを届けていくことで、重要なお客や、会社のファンになってくれるお客と、より効率的に繋がっていけるのではないかと考えている。先ほどの DX も含めてだが、集中と選択といったことが重要な視点になってくると考えている。

【小林みらい企画創造部長】

- ・ Y-biz は、年間何百社からのそういった相談に乗り、新しい視点を取り入れることで売り上げ増進に大きく寄与されている。ぜひ、開設するスタートアップステーションジョージ山形と一緒に連携しながら、プロジェクトを進めていきたい。
- ・ 小野寺先生の山大工学部が持つ有機 EL から始まった多くのとんがった素材を山形県、そして山形大学が育ててきた。大学のナレッジをどのように外に出してきたか、小野寺先生にはノウハウがあると思うので、ぜひ紹介いただきたい。

【小野寺忠司氏】

- ・ 日本発のベンチャーは、実は山大工学部の研究を元に米沢から生まれた帝人。
- ・ NEC のコンピューターに携わっていたころ、米沢駅の裏側に工場があり、その支配人の時に、人口減少に伴い、スタートアップやベンチャーが生まれてこないという問題があり、新しいことをやらないと人口が増えていかないと、会社の中で話になった。

ちょうど2015年ぐらいのことだったが、NPO法人を立ち上げようということで、YRI（ワイ・リサーチ・イノベーション）というNPOを立ち上げた。

- ・ このNPOは、スタンフォード大学研究機関のトップ機関のSRIが支援するNPO団体という形でスタートした
- ・ そうこうしてる間に、知事の発想で山形県がものづくりベンチャー創出支援を5年間のプロジェクトで始めた。吉村知事にはシリコンバレーのスタンフォード大学まで行っていただき、最先端の研究を見ていただいたりする等、山形県では8年前ぐらいから、スタートアップ支援を行っており、当時、県でやっているのは珍しかった。
- ・ そこから、(株)メトセラという慶應先端研で非常に有名な心臓疾患のベンチャー企業や、(株)イムザックという工学技術をうまく使いながら表面に加工する技術を持つ企業、日本でもトップクラスの在庫管理システムを作っているZAICOといったベンチャーがどんどん生まれてきている。
- ・ 私は5年前に大学に来たが、そういったベンチャーをどういう形でスタートアップさせるかという話になった。文部科学省でも、世界をリードできる企業が全く生まれてこない、これは問題だと言っていたことから、EDGE-NEXTとう事業を始めた。
- ・ その事業に、我々、山形大学も早稲田大学と一緒に組んで、コンソーシアム形式で参加した。山形大学では中高生に対して起業家育成プログラムを実施し、ベンチャービジネスをどうやって作り出すか勉強してもらっているが、大学生と社会人に向けても行っている。その結果、大学生からベンチャーが生まれているし、すでにスタートアップをやっている高校生もいる。
- ・ 先日、知事にも来ていただいたサニックスのEVトラックの実用化事業も、EDGE-NEXTの事業を佐伯さんが受けて、新事業を作り出そうということで、スタートした事業から生まれており、可能性は十分あると思っている。いろんな人がサポートしていると、そういった新人も生まれてくるし、学生達はベンチャー起こそうという感じになると思う。

【小林みらい企画創造部長】

- ・ 大学には若い人が集まってくることで、深く研究が進められていること、こういった地域の大事な知的インフラで、スタートアップが生まれてくる。こういったことに山形県として前から支援しており、積み重ねが成果として表れている。ぜひ、知事からも一言お願いしたい。

【吉村知事】

- ・ 8年前のことを思い出した。今、皆さんの話聞くと分かるが、8年前は小野寺先生のおっしゃっていることに、私と副知事が予算をつけたらいいものかどうかとても悩んだ。でも、新しいことやったほうがいいよねと、予算を作ったことを思い出した。

【小林みらい企画創造部長】

- ・ そういった先行投資決断で、サニックスのEVトラックが、発電機搭載型のトラックとして世界初だということで、実用化試験が行われており、成果が出てきている。
- ・ ベンチャーの取組みということで、柴田さんのフェイスブックを拝見すると、日本中、鉄道のある限り回って、各地で新結合を起こしている。JR東日本スタートアッププロ

グラムでは、A I 利酒ベンチャーの取組みとして、新潟で“あなたの好きなお酒をA I が判定します”といったことが行われており、山形駅の近くでもやりたいと思った。

- ・ 先ほど東京と地方という話をしたが、そうは言っても東京には様々なアイデアや人が集まっているので、そこと地方がどんどん有機的な形で繋がっていく、しかも鉄道でも繋がっていくといった形は非常に素晴らしいと思っている。新しい日本のあり方ではないかと思ったが、J R 東日本スタートアップ社のこれまでの取組み事例や、どのように鉄道を使って地方と繋いでいくのか、柴田さんに伺いたい。

【柴田裕氏】

- ・ J R 東日本スタートアップという会社は、J R 東日本が 100%出資し、2018 年に設立したばかりのコーポレート・ベンチャーキャピタル。私は、ぼっぼや社長という名前でブログやフェイスブックで各地の取組みを取り上げているので、よかったらご覧いただければと思う。
- ・ コーポレート・ベンチャーキャピタルが何をやっているかという、まさに先ほど言った新結合に取り組んでいる。J R 東日本が持っているインフラ、7400 キロの鉄道ネットワークであったり、1600 を超える駅であったり、エキナカ、駅ビル、ホテルといった生活に密着したインフラと、ベンチャー企業が持っているわくわくするようなビジネスアイデアであったり、キレイのテクノロジー、これはソフトな部分も多いが、J R が持っていないものをかけ合わせ、新結合して、新しい事業、新しいソリューションを作っている。
- ・ 具体的な事例をいくつか紹介すると、無人決済店舗の 1 号店を高輪でオープンしている。どういう結合をしているかと言うと、店の天井にいっぱいカメラをつけ、これでお客様の行動を捕捉している。ベンチャー企業が提供するセンシング技術と、我々が提供するエキナカというインフラ、K I O S K 以来のノウハウを提供することで、無人のレジを運営する。我々がやりたいのは小売業界の人手不足をテクノロジーで解決すること。これをベンチャー企業のテクノロジーと我々が持っているインフラを掛け合わせることで実現していく。この無人決済店舗は、ファミリーマートとの連携も決まっており、先ほど富松さんがおっしゃった珍味も無人レジで取り扱うことになるかもしれないので、ぜひ展開を進めていきたい。
- ・ そして、駅そばロボット。まさに新結合の結果だと思うが、歴史ある駅そばと、最新のロボットテクノロジーが、掛け合わさることで、日本初ということは世界初になるが、駅そばをロボットが作るという新しい業態を千葉と東京で進めている。これも無人決済店舗と同じで、人手不足が進む中で、何とかして残していこうという思いで新結合を行っている。
- ・ その他、鉄道のメンテナンスでD X を使えるんじゃないかと、我々が持っている現場力、安全力をテクノロジーの力でアップデートするってことをやっている。人の目では気づかないひび割れだったり、異常発熱をドローンが見つけてくれる。我々はそのドローンが蓄積したデータを分析して、メンテナンスに活かしていく。不良箇所の予測といったデータ分析は人にしかできないため、ベンチャー企業と進めている。同じように車

両メンテナンスでも音声デバイスを使って進めている。これまでは、紙に記録したり、タブレットに入力する必要があったが、手が汚れたり、そもそも両手が塞がっている中でそういったことはできなかった。音声デバイスを使用することにより、できるようになった。

- ・ 地域の活性化に我々は力を入れている。特に東北は非常に重要な事業エリアであり、私も東北出身ということもあり、めちゃくちゃ力を入れている。
- ・ 例えば、群馬県みなかみ町の無人駅「土合駅」をグランピングの聖地にしようと、40日間試しにやってみた。人が来ないだろうと思っていたが、たくさんの申込みがあり、埋まった。固定概念では信じられなかった。その結果を受けて、令和2年11月に DOAI VILLAGE という名前で本オープンした。寂れていた駅だったが、今は首都圏や、地元の人もおいでになっている。駅といえば沿線も持っているので、山形県は自治体レベルで広くおもてなしができると思っている。
- ・ 沿線丸ごとホテルという取組みも行っている。列車が着くと、無人駅がフロントになっていて、かっこいいホテルマンが「いらっしゃいませ」と、待合室で出迎える。チェックインしたら、観光ガイドには載っていない自然いっぱいの旅を満喫し、村にある一軒家のホテルへ。そのホテルは以前は校長先生が住んでいた古民家をリノベしたホテル。食事は、地元の旬の食材を使ったオリジナル・メニュー。その日その場所だけの特別な食事、特別な旅を楽しむことができる。コロナ禍の中、密ではない静かな旅を楽しめる地方がチャンスだと思っている。
- ・ その他の取組みとして、新幹鮮魚と我々が呼んでいる取組みがある。ベンチャー企業の地元漁師とのネットワークと、JR東日本の持つ新幹線という高速輸送を掛け合わせて作り上げたのが、新幹線を用いた超高速の「鮮魚」輸送。山形県では天然アユの超高速輸送を行った。先ほど出た鮭も輸送できないかと、話を聞いていて思った。
- ・ また、街づくりが進む高輪ゲートウェイ駅前の工事現場には多数の仮囲いが覆われているが、その殺風景な仮囲いを障がいのある方が描くアートでラッピングするチャレンジを行っている。このアートは、工事が終わったら囲いを撤去して終わるのではなく、アップサイクルして、バッグとして売る。売り上げは障がいのある方に還元され、社会参画を促す。そういうビジネスもやったりしている。ちょうど去年、釜石が70周年だったので、列車をアートでラッピングして走らせてもいる。
- ・ こういう取組みをしているのが、JR東日本スタートアップ、私たちの会社。「ベンチャー×JR」で新しい未来にチャレンジする事業共創プログラム、「JR東日本スタートアッププログラム」を2017年から開催しているが、4年間で応募が923件あった。毎年20社ぐらい採択しており、必ず採択した企業にインフラを提供してやってみる。絶対無理だよなと思っても、試しにやる。実証実験を行ったのが92件で、失敗する方が多いが、それでも41件が事業化に結びついている。
- ・ 我々がやりたいのはベンチャー企業の独創的なアイデア・技術を、JR東日本が持っている社会実装力で後押しすること。行政や、大学とも連携すると、さらにベンチャー企業の飛躍を後押しできるのではないかと我々は考えており、地域を変える、鉄道を

変える、社会を変えるっていうのを我々はテーマとしてやっている。

【小林みらい企画創造部長】

- ・ 山形でも無人駅は社会課題だが、それをグランピングにして、新しい人々の価値に込めていること、そして沿線丸ごとホテルの事業は、地域が盛り上がり、一体化するという意味で、地域の活性にも非常に繋がる、素晴らしいアイデアだと思った。
- ・ 山形大学工学部がある米沢駅はイノベーションの拠点になるのではないかと思い、視察に行ってきた。駅の二階にあまり使われていない会議室があったので、コワーキングルームにしようという話をしたところ、米沢市もそうしようみたいな話になった。沿線丸ごとイノベーションを山形県内の鉄道でできたら面白いなと思っているが、小野寺先生の意見をお聞きしたい。

【小野寺忠司氏】

- ・ 鉄道は人間でいうと血管で、毛細血管まで至るところに鉄道が通っている。東京から米沢まで2時間ぐらいしかかからない。4時間で往復できる。だから駅をビジネスの移動する住居のようなイメージでとらえると、例えば今日は米沢に行って仕事をしよう、明日は山形に行って仕事をしようといったように、そこに関係人口の方が集まる。米沢と山形には、大学の学会があると海外から大勢の方がどんどん来る。そうすると必ず集まる場所ができるので、そこでコミュニティが生まれる。鉄道を上手く起点として、広げることによって、今までのライフスタイルから新しいライフスタイルのビジネスのイメージを作り上げることができるのではないかと思った。

【小林みらい企画創造部長】

- ・ 内田さんがいる長野県と山形県は鉄道を介して繋がっている。また、山形県との共通点として長野県ものすごいハイレベルなものづくり県である。ものづくりも含め、長野県は特に精密機器が非常に強く、山形県と取引でいろいろ繋がっていたりするので、長野から高輪を介して、山形のイノベーションラインと勝手に名付け、イノベーションに取り組んでいきたいと思う。内田さんがJRでいらしたときに、今度できるスタートアップステーション・ジョージ山形で、そんな話を含め、アイデアの交換ができればと思っている。
- ・ 山形幸せデジタル化構想の委員会のテーマの一つである「デジタル人材の不足」だが、これを因数分解していくと、チャンスも生まれるし、内田さんが言っていたように、インドの人がデリーの郊外から手伝ってくれるかもしれないし、コロナが収束したら、インドから山形、長野に助っ人プログラマー達も来てくれて、面白いことができるのではないかと思ったが、渡辺さんの考えを聞かせて欲しい。

【渡辺信生氏】

- ・ いろんな話を聞いて、山形にいろんなチャンスが生まれるという気持ちになり、実際そういった場所に行きたいと思っているが、その一方で、場所ができて、関係人口も来るようになり、盛り上がってきている反面、スタートアップやベンチャーという言葉は、我々にとって当たり前になっているが、世間一般には、まだまだ当たり前ではない。
- ・ 場所があっても、なんかすごいのできたねで終わってるっていうのが現状だと思う。

そのため、スタートアップの認知を若い人たちにどんどん広げ、学生だけではなく、学生以外の人たちも、スタートアップやベンチャーにチャレンジできるような機会を与えないといけない。そこを一緒に取り組んでいきたいと思っている。

【小林みらい企画創造部長】

・ 若者のチャレンジ機会の創出と場所は、どちらも必要なものだと思っている。場所に関して言えば、昨年7月に私が山形県に赴任したときに、霞城セントラルを見て、もうここしかないと思った。霞城セントラルをイノベーション創出のエンジンにして、山形県内と繋がり、そして世界とも繋がっていく。本日のこういう会議も非常に重要だが、日常的に、昔で言えば大学のサークルや高校の部活の部室みたいな感じで、今回、整備したスタートアップステーション・ジョージ山形が気軽な感じで使われると、本当のコミュニティ、Yamagata みらいコミュニティが生まれると思っている。これが場のイメージで、いろんところでできていく。庄内でもできていく、置賜でもできていく、最上でもできていく。そして長野でも高輪でもできていくという、こういった親しみやすい場所ができてくると、スタートアップが認知される。そして、スタートアップベンチャーだけでなく、事業承継に悩んでいる多くの老舗企業の経営者の方々にも、この場所を利用して欲しい。この事業承継問題というのはもともとあった課題だが、ポストコロナやwithコロナという世の中で、時間がもっと早まり直面しているのが現状。まさにこの方々にとっても、先ほど言ったように、部活の部室のような、気軽に利用できる場所としてジョージ山形スペースが機能していくと、スタートアップの人達に、若くてちょっと付き合いにくいというイメージを持つのではなく、話をしてみ、「こういうふうにやっていくとうまくいくのでは？」というような会話が生まれるような場になればと願っている。

【渡辺信生氏】

・ スタートアップへの必要な支援として、まず場が必要ということを感じていた。以前、山形市の七日町にとんがりビルというところがあり、スタートアップや、新しいことにチャレンジしたい方を受入れるシェアオフィスとして使われていて、前職の会社がそこに入居していた。いろいろ動こうとしたが、その場所についてもなかなか関係人口が増えず、そのうち、そういった盛り上がりも、気運もだんだん下がり、会社もそこから退去したことがあった。そうではなく、継続的に、その場所が活性化して行ってそこに行けば誰かがいる、話ができる、一緒に課題を解決できるという場に育てば、とても面白いことができると思っている。事業承継とスタートアップは相性がいいと私も思っているので、どんどん推進していただけると、我々スタートアップ側からも嬉しい。

【小林みらい企画創造部長】

・ 皆様、本日は長時間にわたり話をいただき、感謝申し上げます。初めて聞く話ばかりで、また、これからどういうふうに進めていけばいいかといった、たくさんのヒントが得られたのではないかと思います。最後に知事から感想をいただきたい。

【吉村知事】

・ 本当に皆様からの貴重なご意見、情報をいただき、感謝申し上げます。人の数だけ、地

域の数だけ、可能性があると思った。人と地域をかけ合わせると途方もない数字になる。地方はそういう可能性に満ち溢れており、まだまだわくわくできることを、実践されている皆様のお話を聞いていて感じた。オンラインの時代だからこそやはりできることなのではないかと思った。

- ・ 渡辺さんの話を聞いて、人材が大事だと思った。実は、小野寺先生が進めようとしていたことが、初めは良く分からなかったが、だんだん形になってくると、先進的なことをやっていることが分かってきた。
- ・ スタンフォードやシリコンバレーにも出張で視察に行ってきた。スタンフォードで講義を聞いたが、「ベンチャーの子どもがベンチャーになる」という話があった。ベンチャーの親が、中学生の子どもに小金を預け、「これでスタートアップしてみろ」とやらせてみる。そうすると、自分たちで工夫しているいろんなことをすると聞いた。それを山形でできないだろうかと思ったが、ベンチャーの人や社長といった人材が身の周りにいないという地域がたくさんあり、お願いするのも大変だったが、社長に会ってみる機会を作ってもらったりした。今、オンラインの時代になってきたので、子どもたちにオンラインでベンチャーの方の話を聞いてもらって何か刺激を受けてもらい、色々な可能性にチャレンジできるんだということを学んでもらえるのではないかという希望を持った。本当に皆さんのおかげだと思う。
- ・ このYamagata みらいコミュニティのメンバーである皆さんから、これからも力添えをいただき、山形から、日本、そして世界へと繋がっていけるような、そういう未来へのチャレンジを、一人一人ができるようになったらいいと強く思った。

■閉会

【小林みらい企画創造部長】

- ・ 知事がスタートアップについて熱く語られるのを聞き、数ヶ月前に、知事に私と渡辺産業労働部長が呼ばれ、知事は一言、「山形の未来はスタートアップよ！」とおっしゃったことを思い出した。私はもう圧倒され、これはすごいことになるんじゃないかと、大変な衝撃を受けた。
- ・ 出席の皆様には、長時間にわたる意見交換、感謝申し上げます。以上を持って、第3回Yamagata みらいコミュニティ座談会を閉会する。

以 上